

脳と才能

連載第3回
酒井 邦嘉
東京大学教授・言語脳科学者

「弾こうとする心を育てる 巧みな努力こそ よい教育なのでしょう」

『鈴木鎮一のことば集 一心を育てる』 p.17
(公益社団法人才能教育研究会、2018年)より

鈴木鎮一先生のお言葉を紹介しながら、その奥義^{おうぎ}を科学で考えるという企画です。才能教育研究会がめざす「才能」には、どのような意味が込められているのでしょうか。そしてその才能は、脳のどんな働きに支えられているのでしょうか。

音楽などの情操教育^{かなめ}の要は、豊かな感受性や意志の力の源となる「心」を育てることにあります。どのようにしたら、子どもたちの心をよりよく育てられるのでしょうか。鈴木先生は次のように述べています。

「上手な指導の一つとして気がつくことは、たとえば申すならば、自転車に乗って走る子供の、ハンドルをつかんで、指導するのではなく、自分の意志で走ろうとする子供の前方へ、巧みにアスファルトの走りよい道を正しい方向へつくってやることなのだと思えます。そうしたものです」(同 p.13)

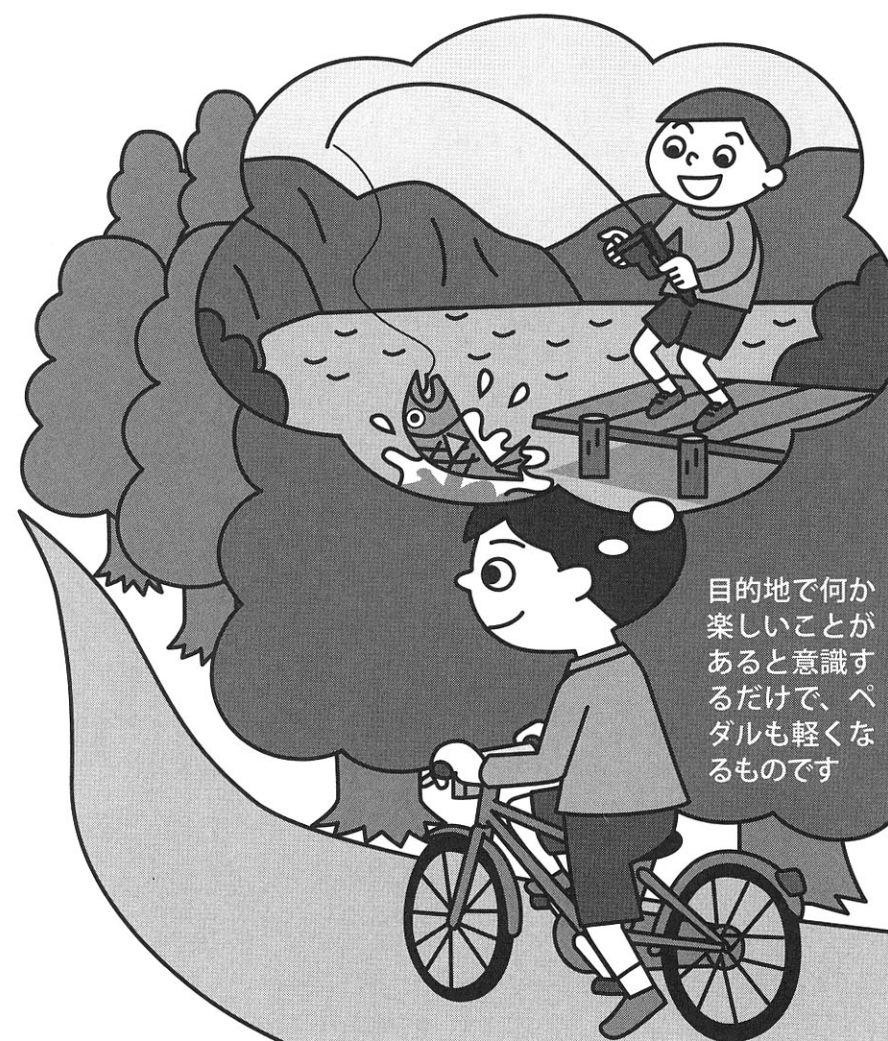
親や先生は、なんとか子ども

もに楽器を弾かせようと指導しがちですが、なかなかうまくいかないものです。それはその子がまだ、自分の意志で弾こうとする段階に達していないからでしょう。「馬を水辺に連れて行くことはできるが、水を飲ませることはできない」ということわざがあります。水は飲みたいから飲むように、楽器も自発的に、そして主体的に弾くことが理想です。私は今年からヴィオラを始めたのですが、弾きたいという思いが強い分、上達も早いように感じています。

鈴木先生の言葉から、教える側の「巧みな努力」とは、弾こうとする意志を引き出すことだとわかります。どんな

学芸の道^{いばら}も茨の道だと思えます。それを正しい方へと向かう舗装道に変えることができたら、あとは本人次第(私次第)でしょう。「意識」のはたらきについて前回紹介しましたが、自分の意志(内なる力)をしっかり持つことが大切です。

◇
19世紀後半に活躍したポール・ブローカは、パリの人類学会で、とても奇妙な言語障害の患者のことを報告しました。その患者は、言われたことはわかるし、何かを言いたいという意志の力は問題ありません。ところが、いくら努力して話してみても、「タン、タン、……」という音し



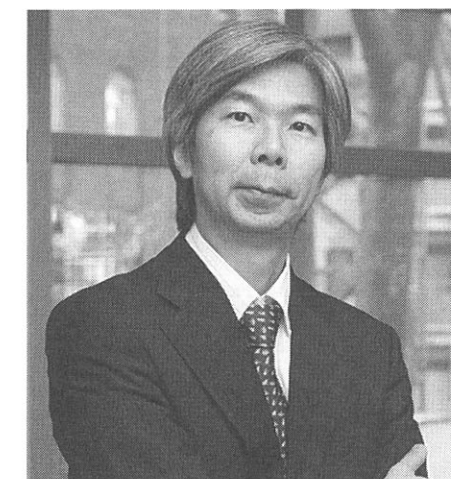
目的地で何か楽しいことがあると意識するだけで、ペダルも軽くなるものです

か出てこないというのです。その原因は、言おうとする意志を実際の発話にしていく過程のどこかで問題が起きたためと考えられます。ブローカは、左脳の前側(前頭葉と呼ばれます)の一部がその過程を担当するという説を唱えました。その脳の領域は、後に「ブローカ野」と名付けられています。

それでは、音楽を表現しようとする意志を実際の演奏にしていく過程では、脳のどの部分がはたらくのでしょうか。それは残念ながらまだ分かっていませんが、2017年から本格的に始まった才能教育研究会と私の研究室との共同研究で、この問題について

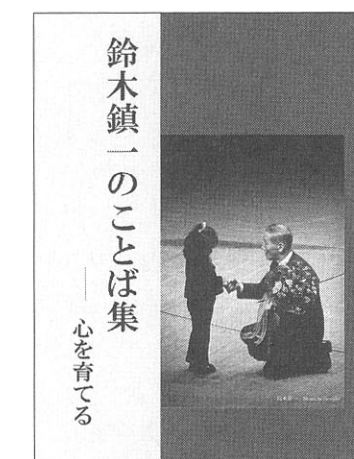
手がかりが得られるかもしれません。というのも、同じブローカ野が音楽でもはたらく可能性があるからです。

意志の力を強く持っていれば、ある曲をもっとこんな風に弾きたいな、と感じたときに、自分ができる弾き方をいろいろ組合わせて工夫できるようにになるでしょう。すると、その曲ではどんなことが表現されているのか、たとえば楽しいのか、ちょっとだけ悲しいのか、といったニュアンスの違いを自分で表現してみたり、作曲家の意図を想像して弾いたりできるようになると思います。そうした素材を曲の流れの中に組み込んでいくうちに、「音楽を創る心」



酒井邦嘉(さかいくによし)
1992年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、理学博士。専門は言語脳科学で、人間に固有の脳機能をイメージング法などで研究している。主著に『言語の脳科学』『科学者という仕事』『科学という考え方』(中公新書)、『脳の言語地図』『ことばの冒険』『こころの冒険』『脳の冒険』(明治書院)、『脳を創る読書』『考える教室』(実業之日本社)、『芸術を創る脳』『高校数学でわかるアインシュタイン』(東京大学出版会)。

が自然と育まれることでしょう。これこそが脳(おそらくブローカ野)のなせる業^{わざ}なのです。



1952年8月から1954年6月までの2年間にわたり会報に掲載された文章が「鈴木鎮一のことば集」として、新たに発刊されました。編集はスズキ教育法研究委員会が担当しています。才能教育研究会本部事務局、東京事務所販売されているほか、アマゾンでも購入できます。500円(税込)です。